

社会に出て役立ったこと ——アメリカ科で学んだ社会人の心得——

第17期 関澤 秀哲（1969年卒業）

先般、アメリカ科同窓会事務局の大山賢治君から連絡があり「アメリカ科時代の思い出」を書くようにとの依頼があった。同君は、私より3年後に新日鐵に入った後輩である。サラリーマン生活をほぼマルドメで過ごした私には、出身学科に相応しいテーマも思いつかずやや気後れがしたが、卒業生の中にはこういうケースもあるのだということをこれから社会に出る後輩たちに知ってもらうのもよいのではないか、と思い直して筆を執ることにした。気楽にお目通しいただければ幸いである。

社会人になってアメリカ科同期の仲間がそれぞれの分野で海外関係の仕事づく中で、私は全く異なる道、すなわち、製鉄会社の総務・人事・労務・秘書・広報・システム・環境などの内部管理部門一筋に歩んだ。いずれは石炭・鉄鉱石・レアメタルなど海外からの原料買い付けや、鋼材輸出などの華々しい業務につくものと思っていたが、結局そういうチャンスには恵まれなかった。大山君は、輸出業務に携わり、ニューヨークやインディアナに10年近くも勤務したのである。

一回しかないサラリーマン人生だと思うと、海外勤務がなかったことは多少寂しい気がしたこともあるが、そのことで真剣に悩んだり、後悔したりすることはなかった。凡人の私には、大なり小なりある仕事を任されたら他の仕事のことなど考えるゆとりがなかったからである。入社7~8年経った頃のある1年間、今の時代なら大問題になるであろうが残業、残業の連続で、土、日を含めて年に5~6日しか休まずに働らきづくめだった記憶もある。そのような時代だった。

では、私にとってアメリカ科で学んだことは社会人になってどう役立ったのであろうか？と自問自答してみる。すぐ頭に浮かぶのは、アメリカ史の授業での“試練”、それによって培われた“根性”、そして“叱られた経験”である。

二年生の時、応援部に所属していた私にとって、「部活は絶対！」であったが、加えて、一年生時から続けていた受験生数名の家庭教師をやめるわけにはいかなかった。そこにアメリカ史の授業が加わった。日本語でさえ読むのに大変な分厚い原書を毎週何冊も渡されて、拾い読みながら辞書を片手に文字通りヒーヒー言わされた。しかも出来が悪く、中屋健一先生にお目玉を食らったことも一度や二度ではない。皆の前で「単細胞！」という有難いお名前（あだ名）を頂戴したのもその頃のことだ。主任教授から直接そういう名前を貰うくらいだから、私のせいで同期の皆さんにはご迷惑をおかけしたかもしれない。改めてお詫び申し上げたい。

ただし、私はこの名前が案外気に入っていた。親しみを込めて言ってくれたような気もしていた。さすがは先生！よく見抜いてくれた！とさえ思った。中屋先生は授業時間中私には“大変怖い存在”であったが、時間外にはガラッと変わって“人間味溢れる親父のような先生”だった。

午前中の授業で、こっぴどく叱られた直後の昼休みに、自宅から持参した弁当を先生の部屋に持ち込んで、先生と伏木千鶴子さんと3人で昼食を共にしたことも何回かあった。先生はよく“ざるそば”を召し上がっていたが、毎回自らの手で日本茶を入れて私にまで飲ませてくださった。また、帰りがけに先生の部屋に立ち寄ったら、そのまま一緒にビールを飲みに連れて行ってくれたこともある。同期の仲間たちと先生の家遊びに行き、私だけ酔っ払ったのも今は懐かしい思い出だ。

公私のけじめ、人と人の接し方、心と心のつながりの大切さ等々、中屋先生には実に多くの素晴らしいことを教えていただいた。この経験は、のちの会社生活に存分に生かされた。「単細胞！」とは言われないまでも、上司に面と向かって叱られたことも数えきれない。学生時代の経験は、そのとき上司がどういう気持ちで怒っているのか？ どうしてもらいたいと思っているのか？ どう対応すればよいのか？ 等を冷静に考える余裕を与えてくれた。そして「上司に怒られたら“しめたっ！”」と思え。上司はダメな奴は叱らない！」「怒られたら前へ進め！ヨットは前から風が吹いてきても前に進む！」など、常識的なサラリーマン哲学を身につけるのにさほど苦労はしなかった。

毎週必ずレポートを提出しなければならなかったことも、その後大いに役立った。

会社に入って“秘書”と言う仕事に14年間の長きにわたって携わる羽目になった。ボスは新日鐵社長・会長、経団連会長等を歴任・兼任した斎藤英四郎さんである。ボスはいろいろな仕事を頼まれると断ることができない人で、社外の肩書きも300近くに及んだ。主要経済団体・業界団体のほかに海外関係の役職も多く、国際鉄鋼協会、日米財界人会議、日米南東部会、日豪経済委員会、日伯経済委員会、日中経済協会、日澳文化協会、日本・DDR（東独）経済委員会、日本アルゼンチン協会、MFP (Multifunction Polis) オーストラリア国際諮問委員会、日仏友好のモニュメント日本委員会等々・・・あげればきりが無い。しかも、海外出張時にはそのトップ（団長）として訪問することが多かったので、行けば必ずスピーチがあり、その準備はほぼすべて秘書の自分が担当しなければならなかった。

ここで私は、アメリカ科で学んだおかげでスピーチ原稿が上手く書けたとか、知識が大いに生かされたとかいうつもりは余りない。確かに、ケネディ大統領の世界に訴えかける格調の高い大統領就任演説や、キング牧師の人々の心に染み込むような説得力ある語り口に耳を傾けて感動した思い出は、スピーチには基調やリズムがいかに大切かということを理解する上でかなりプラスになった気はする。しかし、

それら以上に直接役立ったのは、“決められた納期にきちんと間に合わせる習慣”であった。

サラリーマンに限らず、社会人生活は、“約束・責任・信頼”の上に成り立っている。とくに会社は“組織”で仕事を行う集団であり、“組織”で仕事をするから大きな仕事ができるのだ。そのためには、「組織の一員として約束を守ること」が周囲への最低限の義務であり、仕事の成果とその人物の評価にも繋がる。これもサラリーマンの常識だ。

ある限られた期間ではあったが、出来の悪い自分がアメリカ史のレポート作成で徹夜、徹夜を繰り返し、毎週やっとのことでレポートを提出し、それでも先生から叱られた経験は、何物にも代えることができない宝物であった。そのせいか、秘書時代に次々と要求されるスピーチ原稿の作成が遅れてボスを困らせたことは一度もなかったと思う。

あと一つ付け加える必要があった。先輩と同期の仲間たちに恵まれ、大いにお世話になったことである。私の卒論は、優秀で親切な同期の某君が自分の卒論で多忙を極める中、英文を書き直してくれタイプまで打ってくれた。私はそれを持って、兄から借りた車を運転して某先輩のお宅にお届けする。新婚早々の奥様の美味しい手料理をご馳走になり、先輩は嫌な顔ひとつされずに原稿内容をチェックし温かく指導してくださった。そのあとマージャンまで教えていただいたのも貴重な思い出。某先輩ご夫妻、同期の某君には、生涯感謝し続けていくであろう。

先のサラリーマン哲学につけ加えるならば、「よい仕事をするためには、自分よりできる仲間を探せ！」「よい上司にしっかり仕えよ！」ということかもしれない。さらに、アメリカ科とは離れるが、会社での自分の実務体験から「自分よりできる部下を探せ！仕事が楽になる！」を追加して記しておきたい。

以上のように、私のアメリカ科での学生生活は必ずしも褒められたものではなかったが、そこで身につけたことは実社会に出てから大いに役立った。若い後輩たちのために、47年間のサラリーマン生活を振り返って、恥を忍んでしたためた次第である。

アメリカ科卒業生が、各方面でのびのびと存分の活躍をされるよう期待したい。